

安政年間

津 大地震
浪

記録集

安政年間大地震津浪嘯乃記

安政年間大地震津浪嘯乃事

一頃は嘉永七年甲寅十一月五日の事なりける 昔は志らず眼前其
難于然り なんき至極之ことども誠に言語にのべつくしかた記^キ
大變其阿らましを出盡 末代子孫の心得之た免^メ 此巻卷に記
置候へば 大地震之大變有時ハ 此巻卷を取出し候得度見相心
得に申候
其も其十一月四日[?]午刻過大地震ニ而大きに打響き家乃内に居る
者一人も無之 皆々外面へ逃出る 扱又海は浪立大阿びきにて
網代札場へ浪打上げ 皆々驚き家財衣類山之上又ハ里村などへ
持運び 或は藏二階などへ押込 其用意いたし 其日の夜は寝
もやらず居候處 さて又其晨之五日之早天より 誠ニ天氣は青
天にて 實にびん^糞の毛も動かぬ位のこととき上日和にて 世上に
人氣も直り 活返る心地にて先安堵いたして候故 又家財衣類
取戻し片付安氣にて 悦ひいはひし位の處に 今日はいかなる
悪日そや 五日七ツ申ノ刻天地震動 大地も既にゆりこむかと
案居候處 忽ち大木土塀壁等くずれ落ち 誠に^く恐敷事たと

ふるに物なき大そふ騒動なり

當トうこうする内　はるか沖の方にて大筒之はなつ音にて　火の

柱の如き光りかゝやき　小山の如き大浪またゝく内ち寄せ来る

扱其先より家内相片付　藏へ家財皆つめ込置　怪我なきやう

にと畠中へ家内中出て地震除け　ミなく顔見合せ居る内　早

裏河へ浪打寄る音に驚き大きに周章さわぎ　取物をとり阿へず

東をさしてかけ出し後をかへり見れば　新田かは居家皆々山の

一本にあり（如き）大浪打込　黒烟りうち登ること誠に目覚きこと　又恐

敷こといふ斗なし　其物音わ大竹藪へ火之付たるよふになりひ

ゞき　さながら繪に雲龍の畫しことく相ミへ候故　二眼とも見

やらず　東をさして逃延び　よふ御宮の社壇之上へかけ上

らんと石壇六段かけ上り候處　早くも汐足元迄打寄せ来りと

こうする内に社壇の下は汐まんくとたゝへたり　早日もくれ

に及んで何か何やら闇夜之ことなれば　親は子をよび子は親を

尋眷屬ちりくばらくにて　宮乃御山は唯蚊のなく如く　險

そ難所ときらひなく　はひ登り木にとり付すがり　月影にて新

田河筋を打ミレバ　阿われなる哉　數代連並たる居宅建物　一

所軒も不残流失　荒磯の如くなる　今日こよひは誠にいかなる悪

日そやと十方にくれ居る處 又々地震志きりにて 今は早覺悟
を極め 此まゝ落入ると觀念にて少しも動口なく候とて 長夜
にいやましに夜之明けくるを侍にける 程なく鷄鳴の声きこえ
候 夜もほのくくと明にける 扱又夫より先山にて家内の者に
も尋ね阿ひ 難の中にも互に喜び候処 其内子供二人相見え不
申候へ共 是山に日の入らぬ先から吉地まで遊行候様子も粗聞
江候故安心いたし候て 夫より又々親類中を相尋候處 内四人
不見候 夫から地下中を一見仕候処 瀬ニ東出北出にも 都合
十四軒と光專寺の本堂斗相残り 誠にく眼も當られぬ村中之
有様なり よふく荒跡見廻りミんとわれ芥ミ中江ふみわけ
居宅之跡へ行きければ 只そこゝに礎のみぞ残りも 阿はれと
いふもなかく愚なり 諸道具杯は足元に散乱いたし候へ共
其一兩日の間は誠に十方にくれ 無欲世界とやらにて一向手に
不れず まだどふ成事とか不知とよろく仕て居る内 米麦糶
小麦大豆之類 亦々衣類少々つゝ見當り 先俵物を人只入取拾
ひ 俵物は阿れ跡にて 其まゝにて御上乃御見分を受け よふ
く野はへにして片付 又着替類は付合又他所之親類にて世話
に相成候 且又其頃にて晝夜八奥乃方へ口とまり仕候へ共 勝

手阿しく　さて其後は栖原や甚七と相談の上にて社壇之すみ
にて　板囲いたし四五日雨露を志のぎ　夫れより東甚七方八浪
入ばかり　家には別条なき故先夫にて十二月中旬迄同居敷致
同月中頃より住宅へ移り　どふやらこふやら雨露を志のぎ暮し
候て　明れば安政二卯の春にと候成　さて早々家業に相掛り仕
なれし業にて　紺屋職を始めよふく　世渡り之緒に取付き候
く良^クみの^イ事故　誠にく　難議至極之有様ハ中く　筆にも紙にも
尽しがたきことに候へ共　若しも子孫相傳り候ハ末の者にて
も　かよふなる大變大地震などの時ハ　此一巻を開き見て　心
得手廻も候ハバ大きに助にも相成候事なり　右此難議は殊に逢
うにも全く往芳　百五十年も先二可致書傳へもならし故　大き
なる仕損に相事可なれば　家宅藏など丈夫にても一向當になり
候ハず　家財のたい抔ども　皆々山か又八里村辺へでも持ちちは
こび至よりいたし方なき物なり　天變なれば不同有之候へ共
以前一同五拾年先之かたをは　大きな違ひもなきよふに云傳候
浪打よせしことは初度と二度目は大きに浪高く　次第にやさ
しき物にて　七度も指引有云候と相ミへ候　倩^{ツラツラ}ト軒へ候に
は　我口誠に地獄之上の一足飛にて　よふく　命助かり候へ共

近所の人々は皆々死たへ候くらひの事にて 何事も時乃運とは申なかれ 只心得一つにし大に存亡有 其間其時其候らう事は用心に志くはなし 中く事繁事二候にて愚なる 常にはつくしかだく共有増を書傳へ候 間渡に見ん人相心得可申事也 心得にし事

一 大 一ばんに金銀肌に付 落さぬよふに用心可有こと

一 大地震ゆりたしの節ハ 田畠又ハたて物なき廣地へ出て 怪我なき様用心可致事

一 大地震にて沖の方光り時 又ハ大筒を口すよふな音いたし候て 忽夜大浪打寄来るに違ひなければ 早々山に逃げ延可申事 譬へば筧?に水を入置是をゆす候へば 其水ハ外へこぼれ出るか如し 然れば海は世界ノ水ためなれば 天地動く時にハ必浪立?に上物と心ゑるへし 此所のごきは低地細合入江の轉りへ必ず浪留も一入高く打込むものと相心得可申し事

一 大念事なものなれば錢?又ハ重き品共む筧しろ又ハ風呂敷等に包み 井戸へ沈免置め置くこと

一 地志ん津浪前後大小不同にて 毎度ゆすりやまざるものなり 此度も一兩年ノ間共ゆりやまず 然れども次第に少なく相成

候 此井戸の水皆汐入候故 一向呑れぬことなり 夫故入路
原にて往古より 国師井戸（さゞなみの井戸）と申す井戸を
さらへて口人を助け申す

安政五年乙午年如月下旬筆記畢

津
浪
乃
記
録

こは安政元寅年横濱毛綿屋平兵卫氏のかき綴りし
ものにして弓場万太郎氏乃所蔵なりしをかり來り
てうつし取りぬ

大正十三年

濱上楠松

嘉永七年 寅十一月五日

全年暮
安政元年ニ相成

大地震大津波之年

但し全年より百五十年以前

宝永四年
亥十月四日

大地震大津

浪ニ而此村其時八家数百三十九軒之所百三十四
軒流れ残里五軒との事

嘉永五年子ノ年大日旱 翌年丑年同大日旱 打續き夏中誠に天晴青雲計リニ而余りむら雲なし 雲う□としておそろしく思ひ居候へ共何之変もなく悦び居候 當國ハ米凶作なれ共随分他國ハ米沢山ニ而値段安く益々悦居候處

當年嘉永七年寅六月十四日夜九ツ比大地震ニ而皆々驚き 家をかけ出門ニ而食事杯を致居し 其夜より朝迄小サキ地震三ツゆり 其後日数十五日程の間小サキ地震日々ニツ三ツつゝゆりける 其後ハ何事もなかりけり 同七月閏七月八月も立ち 同九月大阿あぶき高汐二度有之候 是ハ常の阿ぶきとハ違ひ 川一ぱい汐高く満干到而 早く濱并ニ川之ごしら石を返し 其音誠にすさましく 併其勢計リニ而其後何事もなく納りける

爰に一昨年昨年兩年之間異國船度々来朝いたしける 此國を尋るニ北アメリカ合衆國 スベテ皆々交易願ひ之(但し公儀様品替商内之事なる)由聞へ候 但し其船長サ六七十間横巾三四十間 七艘内二艘一面梶取梶ニ大井成ル車ヲ附 此船ハ蒸氣船と号 此車附口船 内ニ而火を焚き出しけれハ 右之車廻り出し船行事到而早き事也 右の船相苧浦賀

港 江戸 品川迄内海 十八里之間へ かゝ里願ひ出ける

夫に付御大名衆多ク彼所へ御出張ニ而 惣勢三十二万余とぞ
相聞江ける 凡三十日も滞船致し其後異國へ歸ける 尚又

其後も一二艘も来朝と相聞へ候共 格別之事候無之由聞江し
扱て又當年嘉永七寅九月異國ヲロシヤ船四千石積位イニ而

軍艦と相見へ候船 當國熊野浦へ來り大井ニさわきける

尤九月十五日紀昷日高浦へ着 夫より十六日早朝由良之湊沖

をハシリ 同日晚有田郡廣之渡かるも島へ掛り 其夜出帆翌

朝加田浦へ汐掛リス 同日泉州沖ヲは志り十八日大阪天保山

(此山八大汐平八郎ト言大阪天満橋与力東米三百目ニコンキ工時ニ筋川ホリ致拵
ヘル 尤天保年中也) 一里半程沖江かゝる 夫迄海路筋紀昷泉州

阿昷騒動大方ならず 大阪ハ申ニ不及 摂津路近國遠國御大

名衆四十頭程御出張ニ而 凡惣人数二十万程と聞江ける 最

初八大阪堺之町人毎日く小舟ニ而見物に参る 其後御役人

衆御出張ニ而 法度ニ相成とかや 尤見物ニ参り候ものギヤマ

の徳利杯口ひけれ共 是ハ其後御志らずニ相成 御上様へ御

取上ニ相成とかや 同十月二日江戸より重き御役人衆大阪江

御登り打遊 彼船へ御申入イレ聞有之由之噂 右之ヲロシヤ船伊

豆之國下田浦へ廻しける 此船同霜月四日下田浦ニ而 大津

浪有之其節破損いたし候との事也 此下田浦八家数千軒程之

所 漸く十四五軒程残り 其外ハ不残流失 死人も数多有つ

て候由也 尚又湊に有之大船小船共皆々破損致しとの事也

右下田浦之津浪杯八前日ニ志らせもなく 高浪來りける由な

れハ 諸事右等□□之事相心得候事肝要也

扱て嘉永七寅霜月四日五ツ比 俄二大地震由り出し やゝ暫く

ゆり止マズ 村中皆々驚き仰天いたし先 火用心第一と火を消

すも有 老若男女廣き道辻杯へにげ出て泣さけびける 彼地震

ゆり止ニて暫くして大阿ぶき 誠にすさまじき勢イニ而川岸一

ぱい満來りける 夫故驚キ面々用心深き者共ハ家財着類杯少々

宛思イくニ里村門前中村畑村之心易き方親類之方へ持ハコビ

ける 併村内ニも心々ニ而右之様子持ハコブを見て阿ざけり笑

ふも有 是ハ大膽擔不敵之様なれ共 變なる時ハ恐るゝ事專セン一と

かや 扱て彼阿ぶ記朝四ツ時比より其夜九ツ時分迄満干やまざ

りける 其間小サキ地震八ツ程ゆり 夜明迄に三ツ都合十一計

りゆりける也 扱又翌五日朝四ツ時分迄小さき地震二ツゆり

夫より天ニむら雲阿れども少しもうごか須^す 風ハ能くなぎ誠に
黒ク覺へける 夫ニ附四日ニハ津波來りぬるやと思ひ居候共 今
日与^ヨ起^キ天氣なれハ 大難ハきのふの大あふきニ而相濟しやと心
得 ソロく彼預置く荷物我家へ引取候ものも阿り 又ハ其儘
預^{オキ}ケ置候ものも阿りける 又晝後より八ツ過迄ハ益々天氣能相^{テンキヨク}
見へ候故 弥納りしと思ひ居候處 七ツ時比俄ニ土煙リ吹來リ
誠にく 大大地震ゆり出し 大地もゆりカエス如ク家之かべ扁^へ
い屋根之瓦を飛シ増く長くゆり 立^{タテ}男女子供廣き所へ寄コゾ
リ 大地震ニは地己^われるモノ也と聞及候故 板置杯を敷泣さけ
びける 中ニハ氏神様ヲ祈るも阿り 念佛申も阿り皆々いきた
る心地ハなかりける 然る處に沖之方音すさ満しくどたんく
く やゝ暫く鳴りひゞ起^キける 阿れハ雷の音なるや又ハ海之さ
ける音なるやと阿や志み 扱ハ聞及津浪來りぬるやと驚きなか
ら 地震之透を見合せ 又々面々之家財を持はこひける 其内
ニ早沖之方より大津浪山之如く 音は何共譬へがたく耳をつら
ぬき 勢ひ込んで滿來リケレハ 皆々泣さけひなから持たる荷
物を途中へなけ捨 命限り根限りにげは志りける 早き者ハ里
村へにげ行 おそき者は宮の社段同東の段宮山北山杯へ命計り

助リアヨヲキ難をノガレけり 中二も横濱村丈ヶ死人男女十七
人也 家凡百軒之所八十軒余流れ十七軒残留也 一筆写本にあり (此夜) 大地
震又一ツ其次段々夜明迄十四五ゆりける 津浪ハ夜九ツ時分迄
七度來りける 夕方ハ一番大津浪夫より明二少き方と相見し 候

一流家 六拾四軒

残り家 二十三軒

但し此内打ヤフリし分も有を本残り別条なき筋八十七軒也

浪之高サ

一網代浦 御制札場 但し緒荷物水揚場也

二丈四尺

此時制札場隣屋敷ニ白眞木有之候ニ付 ビヤクシン 是ニ而寸法相ワカル

一横濱 ヒクキ所ハ浪之高サ一丈五六尺

御タビ所當リハ イバドウ 六七尺位イ

弓場道當リハ 三尺五六尺

御宮近辺ハ三尺位イ 同所石段六段同迄浪來る

馬場筋東出一番高き所へ一尺三四寸より二尺位イ

網代浦 百軒タラス之所阿ら方流れ

残り家十軒程 但し西ノ小口六軒
山際四軒程 但し四人流死ス

念與寺残る 但し寺地浪少し入る

阿戸浦

濱ガワ三十軒程流れ 但し五人流死ス

皆新宅瓦葺ハ残る 大丈夫之筋[?]残る

江ノ駒浦

少々荒れ瓦葺大丈夫ニ而残る

吹井濱 四軒流れ

其外近村海辺浦々二別条無之候

紀弼之内上手ハ大崎下津浦日方浦少々流れ

但し大アレ

同湯浅浦大流れ々廣浦大流れ

但し両浦とも死人数多有之候

尚又廣浦此後大土手テキル

施主濱口儀八衛殿也

同下手八日高名屋浦濱之瀬少々流れ

// 塩谷浦 百三十軒程流れ

同印南浦 本郷と申所家数多流出ス

同田辺 大流れ 此最中二大火ニ而城下町家上々之所大方焼

失致しける

但し城下より一里下手新庄村と申所大方流失ス

同口熊野奥熊野大流れ也

阿波少々流れ土佐大津浪浦々大流れ大阿れ也

夫レニ付土彗文 四國順拜五ヶ年程止り也

右大津浪寅霜月五日より同極月十四日迄雪并ニ小雨少々西風モ吹候へ共押なれて天気能キ方なれ共 右極月十四日迄晝夜小サキ地震度々有之 折ニハ沖之方ニて鳴り 右十四日夜九ツ時分又々津浪之筋ゆり候 地震之十部一位イ續て三ツゆり候 夫より雪大雨ふりける由へ 又々諸人大井ニ驚き夜中ニ里村門前村杯へにけ走るも阿り 其儘残り家に止るも阿り 併し其後ハ何事もなく 夫より翌卯正月四日迄小サキ地震毎日ニツ三ツつゝ鳴ける 正月五日七ツ時比又大なる地震ゆり見る 同年卯春夏秋の間度々大雨大水ニ而所々大阿れ 同年八月廿一日より西北ノ間アナゼ風後西風にて 誠に大大風吹横濱浦丈ヶ麓相成 瓦葺

家耄軒草家三軒吹タヲス 然レ共家内之者無別条 夫ヨリ冬西
風到而強き方翌年迄も小サキ地震地鳴數度有之候也

一 津浪行留リ入寺原鎮守之ホコラより田地三枚程上迄 是より東
南川向イハ石橋飛渡りより見通し 里村尾崎原里村下手ハ名護
谷之口迄

一 津浪之節より横濱村ノ内面々之井戸塩氣有之二付入る 原海
道端之別写本にあり(昔)サヅナミ入井戸とて清水有之由聞傳有けれ共
年久しく用なき故 此井戸ウモレ一向見へざりしを尋ね出
し 堀ウガチシトコロ處 ハタシテ清水己起ワキタトエ 皆々悦是を
汲み 其後川水杯汲けれ共 夏は田地の井を関く故 矢張り
此水を汲みける 此間ニケ年程

大地震津波心得入事

一 火用心第一 但し火を消し家の内ニ居るべから須ズ
一 かべへい石垣古大木之根ニいるへから須ズ
一 山の谷間ニ岩山之下杯ニいるへから須ズ
但しなるき山之尾ニいるべし

一 地震ゆる最中ハ岩山之下杯通るへから須ズ

一 大地震ゆり候へハ跡にて小さき地震数多ゆるものと心得留へし

一 大地震之跡ニ而大井ニ雷之如く沖鳴り候へ共津浪來ると心得べし

右沖なり初メ之時分迄家財取のけ兼候へハ 金銀ハさい布或ハ布袋杯へ入レ 井戸江入置べし 錢杯も如^{カク}ノ^{ゴトク} 斯致へし

錢ハ其儘井戸へなげ込候^{而も} 不苦候 尚又大切なる道具帳面

杯ハ穴を掘りよくうずみ 其うへ江石を置 尚又其上ニ土を

置^べ扁し 尚又津浪之跡ニ而流れ残^リ里之品^{シナ}も有之もの也 夫ニ

付面々不自由の時なれハ必慾^{ヨク}必發るものなり されバ諸事前

後ニ氣^キを附^キくべし 必ずく 他人之家財金錢杯ひらひ取るべ

から須^ず 無據^{ナク}時ハ村役人に相届^ケ可申事

大津浪來ると見るならば 浪をうしろにしてにげる方ハよし

浪を横に見てにけるべから須^ス 浪早^スけれバうしろにして逃

る時ハ 浪より走るほうハはやし 浪を横ニ見てにげる時ハ

浪之ほうハ早し 多く浪に打こまれ死す

一 大地震津浪杯聞時ハ小舟杯へのるべから須^ズ

一 津浪之後ハ土地之工合^{ニ而}汐高き所も有 又ハ汐ヒクキ所も

有ものなり 紀昶由良の湊近辺ハ汐三尺計り高く相なるなり
但し後二少しツゝ直ると見へたり

一 津浪大阿れ之後 二而 近村より見舞米送りヒ下候 (是此ハ相互急變之時給合なり)

其後御上様に御救ひ米願出 御聞濟ヒ爲成下 壱人前一日ニ
二合ツゝ御下ケヒ成□難有頂戴致并二百日小家を村々御用人
足二而御建ヒ下 雨露を凌ぎ皆々悦候事限りなし

尚其後面々名屋建て 或ハ他村より古き家買モトメ思ひく
に普請を致 近々米穀も下直に相成益々？人氣取直り目出度く
らしけるとか候也

一 津浪の年丈ヶ家敷年貢一ヶ年御用捨也 田地御年貢凡半分之御
用捨

一 畑田地阿れ之分御見分の上大小二而御年貢一ヶ年御用捨にて 三
ヶ年五ヶ年六ヶ年ツゝ御用捨也

嘉永七 此暮にかわる 但し津浪の年之

一 安政元年 米壱石二付七拾目より八十目位イ

金兩六十七八匁 錢一匁九十四文位イ 尚又九十二匁も
あり

尚又異国船入津ニ付 諸大名方御物入金多御入用ニ付 金七十目より七十二匁迄いたしける

一此時より三十ヶ年以前迄 文化文政年中三十ヶ年程之間 米麥諸品至而下直ニ而萬民豊かに暮しける 尤米麥石四十目より五十目 金六十四匁位イ 錢丁百八文より丁百四匁位イ 麥安廿五匁より三十匁位イ

一天保弘化年中八米百貳參拾目より一番高直ハ 米三百目麥安貳百目位イ 金六十目より六十二位イ 是ニ応て諸品到而高値ニ而萬民甚々苦敷飢饉困窮致ける

右等の時節も間々有事なれ 米穀下直之時節ニ而も無油断 諸事儉約專らとして 大奢費間敷き事致へから須 尤嘉永三年之比より米穀下直ニ相成候也

(以下二行此本になし 書写時脱落か)

村の真中に有之候へハ横濱光專寺 庫裏流失ニ附北山江地ヲ替再建ス 但し本堂斗り残る

毛 綿 屋 平 兵 衛

安政元寅年今年四十九歳 書之

本書は由良町阿戸の濱上楠松翁所蔵の寫本よりこれをうつした。
本書前半の安政年間大地震津浪嘯乃事は『日高郡誌』災害編にあり、又芝口氏もこれと全様寫本を所持して居られるから、相當ひろく流布したものと思はれる。

昭和貳拾六年拾月貳拾七日

清水 長一郎 誌

あとがき

父のあとがきでは『安政年間大地震嘯乃記』は『日高郡誌』に記載あると記されているが見つからなかったが、『竹内傳七覺書』として載っていた。又後半の『津浪乃記録』は由良町誌資（史）料編に坂口俊夫家資料として既に活字化されている。添付の横浜地域地図は資料編では屋根の様式は省略しているが筆写では瓦とか藁葺きとか一軒づつ區別している。由良町誌のコピーとデジカメ写真を添付した。

平成十八（二〇〇六）年五月十九日

清水 章 博

Handwritten notes at the top of the page, possibly a title or date.



Handwritten notes at the bottom left of the page, providing additional information or instructions.

